

立野ダムの建設中断と公開住民説明会を求める要望書

2017 年 10 月 3 日

国土交通大臣 石井 啓一 殿

賛同者：緒方恭子(代表)、緒方 典、大野裕子、新谷真理、宮部和雄
山野 徹、中島 康、藤本恵子、金津紀代、高木信宏、前田 厚
原口宏司、藤本 剛、勝連夕子、本田涼子、須藤真一郎、赤木光代
峯田千鶴、宮北隆志、山本枝美子、熊谷由美、阿部順子、永尾佳代、
倉田哲也、倉田美穂、上田量章、須藤久仁恵、佐々明生、藤本和子、
松島赫子、牛嶋武良子、佐藤玲子（順不同）

貴職の常日頃のご活躍に心から敬意を表します。

熊本県と言えば、まず思い浮かぶのは雄大な阿蘇山、そして広大なカルデラ、遠くまで広がる阿蘇・くじゅうの大草原、そして噴き出る豊富な地下水や緑豊かな原生林ではないでしょうか。阿蘇が育んだ文化や歴史。これらの宝に私たちは惹かれ、癒され何度も足を運びます。白川上流域の阿蘇は「阿蘇・くじゅう国立公園」として認定されており、最近では世界ジオパークにも認定され、世界的にみても貴重な財産であり、多くの人々を魅了し続ける観光資源です。

【はじめに】

昨年4月、これまで体験したことのない二度の大地震に私たちは直面し、身も心も凍りつくような思いをいたしました。足元が揺れ、地面にしゃがみこみながら、夜の明けを待ち続けていたあの夜の記憶は消そうとしても消せないものです。避難した住民の中から、「橋が落ちたらしい」「山が崩落しているようだ」という声が聞こえていましたが、嘘だろうと思っていました。

ところが夜が明けると「阿蘇大橋が落ちた」、「立野の山の崩落」が事実であり、そればかりか、益城町で、熊本市内で、嘉島で、阿蘇で… 想像していなかった大きな被害が発生していることを知り、地震の脅威・自然災害の恐ろしさを改めて知ったのでした。

さらに自然災害は押し寄せてきます。今年7月上旬に九州北部を襲った大豪雨により

福岡県朝倉市、大分県日田市、そして熊本県北部地方は大きな被害を受けました。濁流と共に流れる大量の木々、山肌に残る山崩れ、うずたかく堆積した流木、さらに家や田畑を埋めた土砂の堆積。テレビで流れた映像は想像を絶するものでした。朝倉市では推定 20 万トン（50 メートルプール 1 4 4 杯に相当する）もの流木が被害を大きくしたと伝えられています。1953（昭和 28）年 6 月 26 日、世にいう 6.26 水害のことも私たちは忘れてはなりません。熊本市では、子飼橋をはじめとして多くの橋が流されました。

はしげた
橋桁に大量の流木、流出家屋の残骸がせき止められている当時の写真が、当時の被害

の甚大さを今に伝えています。「白川上中流域からの流木や流出家屋などが橋脚や桁

で遮られて堆積。子飼橋上流側の水位は一時 2 メートル上昇。白川右岸から溢水、左

岸は破堤、大量の土砂をふくんだ濁流が市街地を襲う」、「阿蘇地方から大量のヨナが流

れ、熊本市内の堆砂量は優に 6 0 0 万トンを超えると推察」（『熊本県下における近代橋梁の発展史に関する研究 戸塚誠司』）とまとめられた資料もあります。

6.26 水害の被害を大きくした要因が上流からの流木であり、大量の火山灰であったことが伝えられているのです。

豪雨災害や大地震を体験した私たちだからこそ、自然は未来へ守り伝える貴重な財産であるとの思いを強くするものであります。

【立野ダムへの疑問】

「はじめに」で述べたような体験を踏まえて、学習を重ねる中で私たちは立野ダム建設について疑問を抱くようになりました。白川と黒川の合流地点近くに、治水専用の穴あきダム（総事業費は 2012（平成 24）年時点で 917 億円）の建設を国は進めようとしています。1983（昭和 58）年 4 月に立野ダム建設事業は着手されました。当時は洪水を防ぐにはダムしかないという巨大ダム建設が当たり前のように語られ、巨大ダムが全国各地の川に作られていました。しかし現在は大きく状況は変化しています。ダムによる治水ではなく、護岸整備や堆積した土砂の除去、あるいは森林の手入れなど、自然に大きな負荷を与えない治水対策を求める声が次第に大きくなっています。

私たちの考える立野ダムへの疑問点を以下に述べてみます。

1. 熊本大地震によって、立野ダム建設予定地周辺の地盤が脆いものであると目に見える形で示されました。それなのに、あの立野に巨大ダムを作っても大丈夫なのでしょうか。万が一、建設予定地の崖が崩落したり、それに伴いダムの基礎が脆くなったりという現象が見られたらどうなるのでしょうか。形あるものは、いずれ壊れていくと認識すべきだと私たちは思っています。
2. 立野ダムは高さ 90 メートル、幅 200 メートルの洪水調節用の 3 つの穴のあるダム（穴は幅 5 メートル×高さ 5 メートル）であると説明されています。今年 7 月、九州北部、とくに福岡県朝倉市、大分県日田市、熊本県北部が受けた豪雨災害の要因は多量の流木であったことが指摘されています。1953（昭和 28）年 6 月 26 日の熊本大水害でも、大量の流木が子飼橋の橋脚きょうきやくによってせき止められ、流木と土砂をふくむ大量の泥水が熊本市街地に流れ込み、甚大な被害となりました。

想定外の大豪雨により大量の流木と土砂により、穴あきダムの穴が流木や土砂で塞がれたら、立野ダムはどうなるのでしょうか？ 制御可能でしょうか？ ダムの堰堤えんていから水が溢れたら…という想定はされているのでしょうか？
3. 阿蘇カルデラ、阿蘇火山、阿蘇・くじゅうの大草原は国立公園であり、また阿蘇ジオパークとして認定された、熊本県が誇る貴重な財産です。すでに柱状節理は 110 メートルにわたり無残に破壊されました。美しい自然の公園を美しいままに後世に伝える義務が私たち大人にはあるはずです。

この国立公園にコンクリート製の巨大人工建築物はふさわしくないと思いますが、いかがでしょうか？
4. 2012（平成 24）年 7 月 12 日の豪雨では、阿蘇カルデラ内だけでなく大津町、菊陽町、熊本市にまで大きな被害がありました。そのとき熊本市の心臓部ともいえる大甲橋から長六橋までの白川の右岸堤防は未完成で、左岸より 2 メートル近く低くなっていました。白川右岸の繁華街は、白川よりずっと低くなっています。洪水直後、「立野ダムによらない自然と生活を守る会」から白川の河川改修早期実現を求めた提言がなされました。すると、それまで長年にわたり何もされてこなかった白川右岸の堤防が 1 年もかけずに完成しました。国交省の素早い対応を高く評価するものです。この工事により、白川河川の流量が最大

2,000t/秒も増えた（国交省ホームページ記載の資料より）ことは実にすばらしいことです。これからも河川改修をしっかりと進めれば、洪水対策には十分であると考えられますが、いかがでしょうか？

5. 放射能汚染の可能性のある「震災汚染土」の焼却灰（8,000 ベクレル/kg 以下）を、セメント等の原材料としてリサイクル化する政策が奨励され、大手企業がこれを受け入れたとききます。焼却処分とはいえ原材料の汚染が事故以前の安全基準値 100 ベクレル/kg を下回っている保証はありません。もしも汚染度の高い原材料からなるコンクリートが今回のダム建設に使用された場合、流域の水質汚染は県下全域に拡散していくものと思われます。そのような事態を容認することは絶対にできません。建設推進に際しては、焼却灰とセメント等原材料の放射能の総量（ベクレル）や請負業者と資材搬入経路を明白にさせていただきたく思います。

私共は熊本県内に住んでおり、立野ダム建設より自然と共存する治水対策を強く望んでいるものです。

上記に述べたような私たち流域住民の疑問点が解消されないまま、建設が進んでいることを危惧しております。「立野ダムって、どう思う？ このまま貴重な自然を壊して巨大ダムを作って大丈夫かしら。コンクリートに汚染された灰が混ぜられているの？ もし汚染がジワジワと広がったら？」等の熊本県民の不安、思いをくみ上げて解消してほしいと願っております。

【要望】

以上の観点から、私たちは治水＝ダム建設には疑問を抱いております。

国は立野ダム建設をいったん中断してください。そして、先に述べた私たちの抱いている疑問点について丁寧に分かり易く説明してください。

そのために、熊本県民への公開住民説明会の開催を強く求めたいと思います。

以上、よろしくご検討ください。

連絡先 緒方恭子 熊本市中央区国府 4-4-48

電話 090-7440-7067